

(研究会の記録)

[脇・心霊講座より]

日常の場における心霊現象と霊能に思う

いわゆる「靈感者」

「灵感者」とか、「霊媒」とよばれる、いわば“超能力”の持ち主とされる人々を、世間一般の人たちはどう見ているのであろうか。そして彼らのもつ“才能”とか、“特殊の能力”について多くの人々はどう評価しているのであろうか。

ある一部の人たちは神仏扱いをし、ある一部の人たちはそれ以上の存在として敬意を払い、まさに拝まんばかりの扱いをしている。そうかと思えば、「民放テレビ局」はこれら霊能者たちを利用して視聴率を上げるための材料にしようとしている。

ここでこの問題を取り上げようとしているのは、上に述べたようないわゆる灵感者がテレビに出たということだけで、彼らが優秀な能力の持ち主であると単純に信じてしまう人々が多くいるということである。そして、そうした灵感者・霊媒者たちを訪ねることで、本来なら自分が最も大切にしなければならない人生の問題、そしてその全てのことに深長かつ冷静に自らが判断すべきことに対して、言い換えればその人の将来について、無防備に何の疑いも容れずに受け入れてしまう状況を作り出していることである。たとえば、彼らが正しい占いをしてくれるものとして、そして彼らの言がこの上なく真実を語っていると信じ、何の疑いもはさまない人々があまりに多いことをきわめて残念なことであると思っている。

正しいと信じていた彼らの口から出た言葉がやがて誤りであることを知った時、別な解決策を模索しようとしてもすでに遅いのである。それは相談者の前途を誤らせるだけでなく、取り返しのつかないところまで追いつめる、ある意味で実に恐ろしい「誤り」、その事実気づかぬ人々が数多くいることを、われわれはよく知っている。

それらは広義の「灵感」に基づいているとは言える。けれども“正しからざる灵感”、“誤りのある灵感”が、「いわゆる灵感」のうちにどの程度含まれているか、それに気づかない灵感者自身も多いのである。

日常生活と心霊現象と

さて、心霊現象は、人類発生以来、あるいは、それ以前からかもしれないが、この地球上の生物を媒体として、何らかの形の心霊現象として、どこかで生起しているのでは

る。まして心霊科学が証明しているように、人間は霊魂によって生命が与えられていること、これはすべての宇宙間の生物についても同じである。ことに人間は、肉体以外に幽体・霊体・本体（神体）を具備し、それらは肉体に加重している。そしてその人の心の持ち方、たとえば心をどの程度正しく統制するかということ、それにふさわしい心の波長が生まれ、さらにそれがどういう類の霊界の居住者と道交するか、それ如何で驚くべき心霊現象がおきることにもなる。

このよい実例として、「近代霊魂研究入門」に“物質化現象”とはいえ、白昼物質化現象（幽霊）という驚くべき現象が霊媒ディクソン師によって生起されている。その内容の説明は本稿では省略するが、その生起に協力している霊界の指導者ジュアニタ霊は物質化現象でその姿を現し、「心霊現象は社会に必要な現象である」と地上人に警告している。

このように、われわれは意識しようとしまいと、生きていること自体が心霊現象の現れであり、そのかわりで日常生活が営まれ、そして霊的進歩という意味での修業が密かに行われているのである。

心霊現象で使命達成

「人間を広義に解すれば<人間は霊の物質化>である」……霊界人は、これが正しい人間観であると主張している。また、われわれ地上人としては、とくに研究者は心霊研究を進めるにしたがい、いち早くこれを理解するはずである。

したがって、人間に心霊現象が生起することは当然なことである。ところが人間には造物主・第一義の神によって（神意）絶対的的使命が各自に先天的に付与されている。そこでこの「使命達成」に関わるすべてのことに対して、あるものは守護霊、あるものは支配霊と異なってはいるが、「責任」をもって背後で協力してくれている。そしてこの使命に到達する過程こそ心霊現象によるわけである。これは心霊学の結論としての人間解明（真の人間観）ができる時、その原理によることがはっきりと理解されることになる。

生命現象は心霊現象

上述のことは、要するに今日のような物質主義の時代（もはや、その終末期が近づいていることを自覚すべきである。それは、神霊主義時代への転換期としての精神に目覚めるべき時代を意味する）においては、ことに自覚すべき“根本義”である。これは亦、今日の科学者が主張するように、「すべて既知の自然科学によって理解されることだけが正しい宇宙に対する認識である」という、このような誤った考え方を改める時期で

もある。宇宙には<心>があり、物質の奥には不思議な働きをもった霊的存在が控えている。このような世界を「霊界」といってよいとすれば、その媒体が地上の物質に内包されている。言い換えれば、すべての物質には、一例外なく、幽体が加重され融合されていることが解明されるとすれば、この研究こそは正しい科学の進歩をたどっているといえる。

世上の科学者が、一刻も速やかに心霊科学を認識することで、これこそ<真の自然科学>による研究成果を把握できる日の来ることを待ち望んでいる。この時にこそ、真理探究の光は輝き、神秘の扉は文字通り開かれるわけである。そしてすべての生命現象は、心霊の働き、神の深奥の働きであることが科学的に立証され、そして生命の本質が物質であり、生化学が唯一発見・解明する手段であるという“科学者の迷妄”を根本から脱する日でもある。

実験は時間をかけて繰り返すこと

一般の人々も、お互いに有している常識は、やはり既知の自然科学で理解されるものが正しいという考え方に基づいている。そしてこれに従えば間違いがないとこれまで考えてきたが、前述したように、われわれの人生には、何か目に見えぬものが背後に働いているようなことを時々体験することがある。このような理屈では考えられぬ場面にもぶつかってもなお理解が及ばないとなると、何か“偶然”ではないかと考えてしまう。私たちの見方からすれば、これらの大半、あるいは、その全ての事例は霊的なものによってなされているのである。

それらをいたずらに否定せず、はたして、われわれの主張が正しいものか実験等によって検証し、あるいはその緒を見出そうとすることは、人生・将来への幸福を作り出す鍵でとなるはずである。しかも、前述したような、何か目に見えないが背後から働いてくれるような体験をされている人たち、理屈では考えられない「助け」とか「救い」に遇された人たちは、心霊現象を体験させられている可能性がある。こうした実験は気長に繰り返されることをおすすめしたい。

「霊媒養成法」の著者レナルド夫人も、その著書のうち「霊媒能力とその養成」の項目で「全く世の中には、何らかの霊的体験を持ちながら、これをどういう意味をもつものかという価値を自覚をせずに、うっかり暮らしている方々が実に沢山おられるようだ」と述べている。皆さんはもしやしたらと考えず、原則として人間にはお互いに霊能という能力を与えられているのである。その「自覚」と「熱意」をもってこれに当たる必要がある。

それは（その意念は）必ずやその人たちの守護霊団と波長を合わすことになる。しかし、その波長は冷やかしや単なる興味による波長（“表面の心”“前面・上っ面の心”）であってはならない。真剣そのものでなくてはならない。この自覚が備わってこそ正しい波長となり、それによってのみ正しい霊能を発現させることができる。

同様の意味のことをレナルド夫人は以下のように述べている。

「普通人は、自分の具わった高等能力に気づかず、一部の学者はこれを超意識能力と呼びます。私もそれでよいとは思いますが、そのためには、この能力を開発することで、それを通じて霊界の宝庫に達するのです。

真理、直覚、インスピレーション等は、通常意識と高等意識との連絡を講ずることによって初めて自己の所有となります。何となれば、この高等意識こそ、霊界の居住者が接触利用しうるもので、これに目覚めていなければ、通常意識の中に滲透する経路がほとんどできあがらないからです。私は通常意識とは、われわれが日常生活に使用する言わば台所道具で、これにより外界の事物を印象します。また、その意識で推理をしたり比較したり、帰納したりしますが、どんなに注意を払って正しい結論を下そうとしても、しばしば計算を誤り、判断を誤ったりします。が、いったん、この高等意識をつかまえると、正感やインスピレーションや真理が自分のものとなり、霊界の友人や支配霊がさかんにわれわれを助けてくれます。で、われわれは精神的にはしばしば霊界の人たちと共同生活を営むわけです。」

「正しい霊能発揮への道」の著者であるアメリカの名心霊研究家ウエルチも、レナルド夫人の意見と同様な見解を示し、精神統一や無意識についての解釈の中で詳しく述べている。

一応、簡単な解説ではあるが、心霊現象を生起させる「高等意識」なるものについて、ご理解いただければと思う。